

第五節 踊り

第五章年中行事の冒頭で、年中行事は総じて淡白であると述べているように、踊りや民謡もまたしかりで年々すたれる傾向にある。

時代思潮の変化といえはそれまでだが、民俗芸能の保存や伝承の面からは憂慮すべきことである。

本節の踊りについては、和泊町中央公民館が昭和四十二年十月に発行した「和泊町の文化財」に収められている踊りについて、加筆修正のうえ全文を転記した。

一 手々知名の「遊び踊り」

(一) 手習い始め

1 手習い始めたし 誰が始めがねや ソレ

貫ち佩かんでイしりやヨー 散りてイねさみ
チエンチエン ヨーチエンチエン
シタリガチエンチエン ヨーチエンチエン

3 打割りてイ咲ちユぬヨー 百合ぬ花見りば
サーヒヤルヒヤールイ チヤシユガヒヤールイ
寄てイいちユむ年むヨー 若さなゆい
チエンチエン ヨーチエンチエン
シタリガチエンチエン ヨーチエンチエン

4 昔神代からヨー 知ちうたぬ手振り
サーヒヤールイ チヤシガヒヤールイ
忘りらぬ為にヨー しらにヤちヤすが
チエンチエン ヨーチエンチエン
シタリガチエンチエン ヨーチエンチエン

(三) 今年どん節

1 今年どん節 大和ぬ流行 ナー ソレ
やがてイ道之島 流行わたる

大和美ら兄弟ぬ 始めたちやむ ソレ

2 親兄弟ぬ愛しヤ 朝夕打ち笑てイ ソレ
一人助き助き 浮世わたら ソレ

3 月に願立てイてイ星に願立てイてイソレ
二人親がなし 百世願ら ソレ

4 昔神代から 知ちうたぬ手振りソレ
忘りらぬ為に しらにヤちヤすよソレ

(二) ちくんとぬ節

1 ちくんとぬ節はヤヨー 流行ばどウ美らさ
サーヒヤルヒヤールイ チヤシユガヒヤールイ
あやい へーイ美らさヨー あやいへースリ
チエンチエン ヨーチエンチエン
シタリガチエンチエン ヨーチエンチエン

2 芋ぬ葉にたまるヨー 朝露ぬ真玉
サーヒヤルヒヤールイ チヤシユガヒヤールイ

ハラドンドン マタイトウ シュンガネ

2 沖の渡中に たいまつとウぶち ナー ソレ
上り下りぬ 船どウ待ちユる
ハラドンドン マタイトウ シュンガネ

3 高い山から 谷底見りや ナー ソレ
瓜やなすびぬ 花ざかり
ハラドンドン マタイトウ シュンガネ

4 昔神代から しちうたぬ手振り ナー ソレ
忘りらぬ為に しらにヤちヤすよ
ハラドンドン マタイトウ シュンガネ

(四) 作たぬ米

1 今年作たぬ米は しんし玉ぬ実りしユさ
シュンサミ シュンサミ

2 あまぐしやむだろさ 肝ぬみどウやゆる

シユンサミ シユンサミ
吾がだろさしりや 吾家ぬ立ちユみ立ちユみ
シユンサミ シユンサミ

3 十七八吾ちヤが 引ちヤぎゆぬ杵

シユンサミ シユンサミ
地にゆとみかち 搗かば見より見より
シユンサミ シユンサミ

4 昔神代から しちうたぬ手振り

シユンサミ シユンサミ
忘りらぬ為に しらにヤちヤすよちヤすよ
シユンサミ シユンサミ

右四つの歌についての踊りを総称して「遊び踊り」と呼んでいる。

いつのころどこから、どのような経緯で伝来したかについての記録はもちろん、言い伝えさえも残っていないが、明治中葉ころまでは、手々知名字の婦人たちが、長浜の砂浜（十五夜原またはハニクント）でお盆の夜「盆



1 遊び踊りのようす

踊り」として、または中秋の名月をめてながら「十五夜踊り」として夜通し踊り、遊び興じたものだと言えられている。

町内の他字では往昔、玉城宇で踊っていたと、玉城字の古老の話であるが、いまはすたれて跡形も留めていないことから、この踊

りは、手々知名字のみに温存されてきたようである。

一の「手習い始め」、二の「ちくんでぬ節」、四の「作たぬ米」はいずれも歌詩の形式が、八八八六の琉歌形式であるのに比べ、三の「どんどん節」は七七七五調であり、こちら辺にこの遊び踊りの由来の遠因を探る一つの手掛かりが潜んでいるかのようでもある。

すなわち、三のどんどん節の(二)は指宿地方の「さまふり」に、(三)は坊津地方の「奴踊」や国分地方の「どけ節」

にそのままの歌詞で歌われているからである。

本島の文化には、本土から南下したものの、沖縄から北上したものが渾然融和しているものが多いと評される向きもあるが、この踊りだけについてみても、まさしく、本土と沖縄の文化のたまり場の観なきにしもあらずである。

各歌の最後(四)の「昔神代から…」はいずれにも共通しているが、もともといずれかの原歌だったものを採用したもので、歌い方の器用さを物語っているかのように見える。

明治中期になって、沖縄芝居が乗り込んで、木戸銭を払って十分慰安が求められるようになり、自ら演じて自ら慰める必要もなくなり、民衆も昔の島の踊りを振りすてて、沖縄の歌や踊りに陶醉するようになったので、この「遊び踊り」も自然それと運命をともし、いつしか字民から忘れ去られていたが、大正天皇の即位御大典に字出演の余興として、御大典奉祝歌を作詞して、「遊び踊り」の振り付けで踊り、喝さいを受けたのに勢いを得、それ以来ようやく復活することになったといわれている。

大正御大典のころまでは、十三種類ほどもあったとのことであるが、現在残っているのはわずかに五、六種にすぎないとのことである。

囃しはただ太鼓だけで、舞姿も農婦の素朴さと力強さで元気いっぱい歌い舞っていたとの伝えであるが、現在では沖縄舞踊式に、優美に軟化したこととある。

特徴として、人数に制限なく多人数で踊り、舞につきものの三味線は不要で、太鼓だけで調子を合わせ、自分たちで歌いながら踊るところは他の踊りと異なる点である。

かつて、「ラジオ東京」の取材班一行に同行して、早稲田大学の本田安次教授が来島した際、この「遊び踊り」を披露したところ、「手振りの複雑さや美しさは全国に例がない」と推奨され、ぜひ保存してほしいとの要望等にこたえて、字で保存会を設け、会則等を定め保存につとめている。

現在、字の大事業や町の行事にも参加して、町内に広く知られるようになった。

ソノヨイヤナ 畦布若ニセガ
サー揃りてイ美らさ

ハイヤセンスル スリルトウトエン
シーシシシ ハイヤイヤ サツサ

「センスル節」は一の「首里ぬひら」と二の「せんす
る節」と二つの歌で構成されている。これは、笠を打ち
振りながら踊る軽快な男性的農民踊である。貢物踊りの
中の一つであろう。

生存していれば今年（一九六七年）百四歳になる人た
ちの十二、十三歳のころ、貢物踊というのが畦布には
あったと伝えられている。当時の貢物踊りで現在畦布に
残っている踊りには、

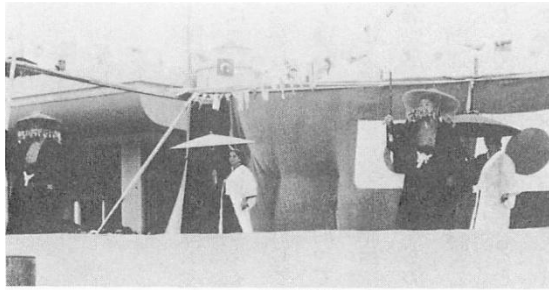
子供踊りに、 御前風、風廻や、朝戸八間

中人踊りに、 ドンドン節、ウチナラシ

大人踊りに、 中島、中風、傘や雨降い

等があつて、これらとともに獅子舞もあつたということ
である。

なお二の「せんする節」は、沖繩の「さいんする節」
と題名が似ているので混同されるが、「さいんする節」は、



4 忍び踊り

了される踊りである。
この踊りは大衆のた
れもが踊れるものでな
く、あらかじめ選定さ
れた何人かの娘がみつ
ちりけいこしなると踊
れるものでなく、その
ために例えば琉球の
昔、冠船渡来の際歓迎
の奉納舞の一つとされ
ていたものではなから
うか？とさえ評する人
もいるくらいである。

百余年前にできた戯曲大川敵討の主人公「村原の比屋」
が、敵状を探るために物売りに紛して出立するときの歌
で「唐や大和の珍し物、匂ひピン付、香しヤ物、丁子
白檀、甘生姜、刻みタバコも持つちユヤびん。キセル
も宝蔵も持つちユヤびん。その外いろいろ持つちユヤび
ん。代も安めてあげやびる。米とも粟とも替やびん。お
望みの物や買うてイ給れ」というものである。

四 国頭の「忍び踊り」

忍ぶ夜の月に 情有てイ給り
他人知らぬ内に 忍でイいかむ

この踊りの来歴は不明であるが、歌詞の形式が八八八
六調の琉歌であることから、沖繩から渡来したものであ
ることは間違いない。以前（七、八十代の人の若いころ）
出花字でも踊られていたということであるが、現在では
国頭字だけで踊られている。

蛇の目傘を持ちそれを打ち振り、開けてさして行く動
作は勇壮とも見える中に優雅さを感じられ、だれもが魅

ナカスミテイ ハリバ ヨイヨイ

2 ダリニ ヒンヨー クヌヤー ハルカー ハーワ

ダリヒー ハルカ ハーワ

マワイタ ハラヂ ハリバ ヨイヨイ

3 ヤドウヌヒンヨー クヌユー ウチレー

ヤドウニヘーウチ ハリバ ヨイヨイ

4 ムゾトウヒンヨー クヌイ イーイチゴホーワ

ムゾホトウ イーイチゴホーワ

チヂター ハラヂ ハリバ ヨイヨイ

5 チワハヤーヤ フーフフロ ホイー

ユールン ナアーラーエー

6 スリヤ マヒンヨー ホーホ マアクートトウニ

ワナー アーハン ハアーハン ムウムトーカー

アシガトー スリヤ ナーヌヨ

フーヤ イマカ アワナ スリヤヒンヨー

五 国頭の「竿打踊り」

(一) グシヤクヒンヨーの歌詞

1 グシヤクヒンヨー クーヌ テーヒーヌゴーホイ
グーシヤーハークーケー テーヒヌゴーホイ

ホホーチン ニーテチトー ホー チトーテ
チイトホー チイトホー チトテ

7 スリヤ ヒンヨー ホホッテンージ クワナー
アーハン ハーハンクー フームヌ アン
アユリートウ スリアジー ユーファン ハー
シヌヘー ヘグンユー アヤー アシロオトサ
スリヤ ヒンヨー ホホー チンーテ チート
ホーチテト ウテー
チトー ホチートテ

国頭字に数百年前から伝えられているこの「竿打踊り」
についての来歴は不明である。聞くところによれば、む
つかしい一語一句を解釈して詩にした記録はなく、意味
も通じないままこれを踊っているという。

この踊りは、歌詞の語呂や歌曲の感じから推測して、
薩摩藩から伝わってきたものではないかと考えられる。
前述したとおり、解説された文献もなくそのまま伝
わっているが、解説できると、歌詞から本土、琉球との
かわりや区別がはつきりするであろう。

ナーク クナヨ

3 トーアン カサー クンホーサ
チイレイヘイ チハイ ミユサン ハマス

4 シモイシモイイ ビンヌージョー
ロエー コーレ チューー モオーテ
モオロン モオロン ヌ アークマ
ウジョ ククセ アラハン ハーリガタ アヤン
ハーリガタ アヤン ハーリガタ アヤン
ハヤオモシン ヘルヨ ハイ シーブヤアン
ハア クークーフーロ アイイン ワ
クモーヨーニ マーキータ ヘイスリヤ
チイチエー ヘムー ホークムン ホーカ
ハイロー イローホイロー ホイ



5 子供たちによる竿打踊り

この踊りも、手々知
名の「遊び踊り」と同
じく三味線の伴奏を得
ないで、歌い手の歌の
みで踊るところに特色
がある。字や町の大き
な行事に出演し、勇壯
な踊りぶりに好評を得
ている。

(二) 歌詞2

1 トビーサエー ヘヤニ ヤーヌル
ビーヒガ ナーク ユウシ
ヒーガ ムーシー ナーク ユウシ

2 トーアチササ ハーハリ ナアーク
クナヨサンー ハーム サーハ アハリー

六 永嶺の「収納米」

収納米は 御待な ミサイ
収納米は 駆廻り ハヤサ
一万石の 収納は シユトウ
一万石一斗一升一合までも イチマンイコウイツトウイツンショウイチゴウマデイム
収納吏が 屯倉に ウクラニ
納めて 受取り 給った ウサミテイ ウキトウリ タマツタ

この踊りの来歴も不明である。しかし題目や歌詞の内
容等から推測して、薩摩藩時代における年貢米を収納す
る際の様子を歌舞にしたものではないかと思われる。

踊りは円陣になって踊り、真ん中で網笠をかぶり、両
手に扇子を持ちハヤシを言いながら踊る。

踊りの特徴は、円になる人たちがそれぞれ鉄製の器を
持ちそれを打ちながら踊ることである。鉄製の器はこれ

と行って決まっていはいないようである。上の写真を見ると、鉄器は不要になった鋏くわの刃やスキー（キーザイ）の刃等々まちまちである。



6 踊りを終えて

奄々えんえんたる状態であるといわねばなるまい。

本島を始め、奄美全域に琉球から伝来した三味線があり、現在の中年層あたりの人々には愛用されているが、若年層には手に取ろうとする者さえ見あたらないところから、何年か後には、この種のものをも文化財として保護の必要が叫ばれるであろう。

三味線と歌舞は、切っても切れぬ縁がある。それは、三味線の音に歌声がのるからである。

したがって、本節で述べた三味線の伴奏を必要とする踊りや記述できなかった他の多くの踊りも、三味線がなければ踊れないことになるからである。 以上

付記

テレビやラジオが各家庭に備えつけられ、また楽器もその数が増えて、そのいずれを樂しむかに迷う現在からすれば、自分で弾じ、歌いかつ舞って快樂を味わい慰めていた時代はいつしか昔の夢となり、空間的距離のいかににもかかわらず、他人の演技が享樂できるようになって今日では、郷土に残っている優雅な舞も、まさに氣息